核兵器なくす

亡き仲間背負って証言

被団協 平和賞

戦後80年を前に「核なき世界」へ向けた厳しい状況を迎えた。地球のあちこちで核の威嚇が繰り返される中、世界で唯一、戦争で核兵器を使われた日本の被爆者団体へのノーベル平和賞授与が11日決まった。日本原水爆被害者団体協議会（被団協）の関係者は「正義になった」と喜びをかみしめ、「長年の幸えへの賞だ」と先人に敬意を表した。朗報になお「被爆国の責任を果たしたい」と誓いを新たにした。

【1面に本記】

元事務局長 田中熙巳さん

ノーベル平和賞受賞が決まり、報道陣に喜びを語る被団協の田中熙巳さん ＝11日夜、埼玉県新座市

被団協の田中熙巳さん（92）＝埼玉県新座市＝は運動を最前線で仕切る事務局長を長年務めた後、2017年から「運動のシンボル」とされる代表委員に就任した。ノーベル平和賞受賞が決まり「信じられないけどうれしい」。ロシアのウクライナ侵攻など、世界で核の脅威が高まるなか、先立った仲間たちのためにも、核兵器廃絶という悲願の実現を「諦めない」と誓う。

「受賞する夢をこれまで何度も見てきた。それが正夢になった」。11日、自宅前で報道陣の取材に応じ笑みを見せた。「戦争で安全を保とうとするのは間違っている。政治家も含め多くの人が核の恐ろしさを知らない。だから経験した人の声を聞いてほしい」と力を込めた。

13歳だった1945年8月9日、長崎市の爆心地から3・2キロの自宅で被爆した。祖父や伯母ら親族5人を亡くし、自らも原爆症に苦しんだ。

戦後、東北大の研究者として移り住んだ仙台市で、被爆者運動に参加。健康だった自身が前に出ることを嫌い「大変な方々のお手伝いがしたい」と、裏方として支えた。

だが、一緒に世界を飛び回った人々は次々に亡くなり、やがて自分も証言者に。2015年の核拡散防止条約（NPT）再検討会議では、被爆者を代表して米ニューヨークの国連本部で演説し「核兵器廃絶をもう待てない」と各国に迫った。

目線はいつも世界に向いている。17年7月に国連で採択された核兵器禁止条約を「運動の一つの達成点」と評価。同年12月、条約制定に尽力した非政府組織（NGO）「核兵器廃絶国際キャンペーン」（ICAN）のノーベル平和賞授賞式に出席し「あの人にここにいてほしかった」と、亡くなった大勢の仲間を思い浮かべ、涙がこぼれないように上を向いた。

次は核保有国や、日本など核の傘の下にいる国を参加させることだ。「被爆者の言葉を聴けば、変わるはずだと、証言の力を信じる。突き動かしているのは『亡くなった仲間の思いを背負っている。核廃絶を諦めない』との思いだ。

ロシアのウクライナ侵攻や、中東での戦闘激化など、国際情勢は悪化の一途をたどる。それでも―。「被爆者は諦めない。悪い情勢なら、より力を入れて運動するのが被爆者です」

県内被爆者「平和の重みかみしめて」

ノーベル平和賞の受賞を受け、県内の関係者からも喜びの声が上がった。

県原爆被害者協議会で事務局を務める福島市の池沢恵芳子さん（83）は「受賞は本当に良いことだと思う。二度と核兵器が使われてはならない。戦争と核兵器のない世界になってほしい」と願った。

池沢さんはほとんど記憶がないが、4歳の時に長崎で被爆。結婚を機に本県で暮らし始め、事務局を担ってきた。「県被爆協を立ち上げた故山田舜さん（元福島大学長）や星埜惇さん（同）と呼びかけ合いたい」とし、「世界中で戦争や紛争が絶えない中で喜んではかりられない。平和の重みをもっとかみしめないといけない」と話した。

父が広島で被爆した矢祭町長の佐川正一郎さん（72）は「これまでの活動が認められたということ。とても意義深いことだ」と語った。

佐川さんの父安正さんは、1945年2月、陸軍船舶特別幹部候補生として志願入隊。原爆が投下された2日後の8月8日、広島に入り、15日まで人命救助や警備に当たったという。佐川さんは「今後も活動を続けていくことで、世界の平和につながっていくと思う」と話した。

ノーベル平和賞授賞理由全文

ノーベル賞委員会が11日発表した平和賞授賞理由の全文は次の通り。

【1面に本記】

ノルウェーのノーベル賞委員会は2024年のノーベル平和賞を日本の団体「日本被団協」に授与することを決めた。ヒバクシャ（被爆者）としても知られる広島、長崎の原爆生存者による草の根運動であり、核兵器のない世界を実現するための努力と、核兵器が二度と使われてはならないことを目撃証言を通じて示してきたことが授賞理由だ。

1946年8月の原爆投下を受けて世界的な運動が巻き起こり、そのメンバーらは核兵器の使用がもたらす道徳上の破滅的な結果について認識を高めるため、広島に核兵器使用は道徳的に許されないと命じた。

これらの歴史の証人たちは個人の体験談から、自らの経験に基づく教育キャンペーンをつくり出し、核兵器の拡散と使用に対する緊急の警告を発することによって、世界中で核兵器に対する幅広い反対運動を生み出した。

被爆者はわれわれに貢献してきた。被爆者はわれわれのことを表し、考えられないことを考え、核兵器によってもたらされる迫害し難い痛みと苦しみを何とか理解するお助けとなっている。

ノーベル賞委員会は約80年間戦争で核兵器が使われない一つの事実を認めたい。日本被団協と被爆者の代表らによる並外れた努力は、核のタブーの確立に大きく貢献してきた。それゆえ、今日、核兵器使用に対するこのタブーが圧力にさらされていることは憂慮すべきことだ。

核兵器使用は国際の法の近代化と改革を進めている。21年の平和賞はアルフレド・ノーベルの「人類と諸国民の兄弟愛を促進し、常備軍の廃止や平和会議の開催を促進するための最も多くを成し遂げた人物に与えられる」という願いを反映していた。人類の歴史で今こそ、核兵器とは何かを思い起こす価値がある。それは世界がかつて経験した最も破壊的な兵器だ。

米国の2発の原爆によって、広島と長崎の推定12万の市民が殺害されてから来年で80年を迎える。それにも匹敵する数の人々がその後「日本被団協」に授与するや放射線障害で死亡した。ヒバクシャ（被爆者）として知られる広島、長崎の原爆生存者は、それらの核兵器は数百万もの人々を殺傷可能で、気候にも破滅的な影響を与えることを示した。

明らかに核兵器は数百万もの人々を殺傷可能で、気候にも破滅的な影響を与える。核戦争はわれわれの文明を破壊しかねない。

広島と長崎の地獄を生きぬいた人々の運命は長きにわたり隠され、無視されてきた。50年、地域の被爆者団体で、本年末に向けて行われる核兵器の使用がもたらす道徳上の破滅的な結果について認識を高めるため、広島に核兵器使用は道徳的に許されないと命じた。

これらの歴史の証人たちは個人の体験談から、自らの経験に基づく教育キャンペーンをつくり出し、核兵器の拡散と使用に対する緊急の警告を発することによって、世界中で核兵器に対する幅広い反対運動を生み出した。

日本被団協は何千件もの目撃証言を提供し、決議や公式なアピールを発表し、国連やさまざまな平和会議に証言代表団を派遣して、核兵器の差し迫った必要性を世界に訴えてきた。

いつか歴史の目撃者としての被爆者はわれわれの前にいなくなる。しかし、記憶を守る強い文化と継続的な関与により、日本の新たな世代は被爆者の経験とメッセージを引き継いでいくだろう。彼らは世界中の人々を鼓舞し、教育している。そして彼らは、人類の平和な未来の前提条件である核のタブーを維持するために貢献している。

24年の平和賞を日本被団協に授与する決定は、アルフレド・ノーベルの遺志にしっかりと沿っている。今年の賞は、委員会がこれまでに核軍縮や軍備縮減に授与してきた立派な賞の、そうそうたるエリストに加わるものだ。

24年の平和賞はアルフレド・ノーベルの「人類と諸国民の兄弟愛を促進し、常備軍の廃止や平和会議の開催を促進するための最も多くを成し遂げた人物に与えられる」という願いを反映していた。人類の歴史で今こそ、核兵器とは何かを思い起こす価値がある。それは

オスロ、2024年10月11日